

ネワリー語とエスキモー語の対照研究^{*}

——「格」について——

田 中 泰 賢

§1 対 照 研 究

言語には普遍的な制約があるという仮説が対照分析を行う上の基本となっている。おのおのの言語を自立的体系と見なした上での、文法、論理、経験の包括的分析などの言語間にある顕著な相違点を明らかにし、言語の特色づけを行う。言語はその構造に従って分類される。即ちこの言語構造という観点から分類するのが、言語研究にとり、より一層本質的といえるだろう。

言語構造における範疇は、例えば言語の表現面では母音と子音、アクセントと抑揚等、又言語の内容面では格、文法的性、数のような文法的範疇である。そしてこういった類型的方法によって諸言語がどのような一般的法則に従って変化し、どのような変化の可能性を含んでいるかについての理解に近づくことが可能となるであろう。

ネワリー語とエスキモー語の対照、特に今回は言語の内容面である「格」について調べ、二言語間の相違点を明らかにしてゆきたいと思っている。

§2 格 について

格はアリストテレスによって $\pi\tau\tilde{\omega}\sigma\iota\varsigma$ (a falling, fall) と呼ばれた。これは名詞だけに限られていなかったが、ストア学派がこの名を名詞(形容詞)、代名詞、定冠詞に限定したのである。しかしエスキモー語では疑問詞、副詞も格変化を行うから、この定義に限定され得ない事がわかる。次の通りである。

(1) kina 「誰」 単数

自 動 格	kina	誰	
他 動 格	kia	誰, 誰の	
所 格	kiname 又 kime	誰に於て	
奪 格	kinamit 又 kimit	誰から	
通 過 格	kinakut	誰を通して	
到 来 格	kinamut 又 kimut	誰に	
類 似 格	kinamik 又 kimik	誰を	kinatut 誰のような

ここでは省略するが、*suk*-「何」も上と同じように屈折する。

(2) 副 詞

所 格	<i>mana</i>	ここに於て	<i>tagvane</i>	そこに於て
奪 格	<i>mangat</i>	ここから	<i>tagvangat</i>	そこから
通過格	<i>mauna</i>	ここを通じて	<i>tagvuna</i>	ここを通じて
到来格	<i>maunga</i>	ここに	<i>tagvunga</i>	そこに

ikane「向うの」も又同じである。格を離れてこれら疑問詞、副詞、名詞等は文に機能する事は出来ない。つまり動詞にとって時制が最も重要な屈折の範疇であると同様に、格は動詞を除いた品詞、特に名詞等の屈折範疇の中で最も重要なものである。その際の格は有形と無形を問わない。格は名詞（エスキモー語では、疑問詞、副詞等）と文の相関性の範疇であるといえる。格は、単に2つの対象間の一つの関係を言語的に表現する範疇のみではない。それは文全体に対する関係である。格の数が多いので知られているのはフィンランド語で、泉井久之助博士（1967）は16とみなし、ブルームフィールド（1969）は20とみなしている。観点によって、格の数が変わってくるのは興味深い。そういう意味で格は一般の言語における最も非合理的な部分の一つとも言える。

§ 3 ネワール語について

シナ・チベット語族のヒマラヤ語群に属する言語である。ネパールの蒙古系民族であるネワール人によって話されている。今回取り上げたのはカトマンズ市で話されているネワール語であり、このカトマンズのネワール語とブクタプルのそれとは音韻的にも語彙的にもかなり違うらしい。

§ 4 エスキモー語について

エスキモー語はエスキモー・アリュート語系の一つである。彼等は自称、イヌイトと言っている。エスキモーとは、生肉を食うものという意味で、話し手は5万人位と推定されている。グリーンランドからアラスカにかけて極北地方に散在し、一部はソ連邦東端地方にも分布している。方言差も大きくて、グリーンランドの方言とアラスカのそれとは、英語と独語以上に違っている。今回取り上げたのはカナダのラブラドル半島で話されているエスキモー語である。

§ 5.1 ネワール語の格の機能

ネワール語には次の5つの格がある。

無形格 (Unmarked)	～は、～が、～を
動作主格 (Agentive)	～で、～によって
所 格 (Locative)	～の中に、～と共に
目的格 (Objective)	～に
属 格 (Genitive)	～の、～の為に

動作主格は動詞の主語であると考えられる。「文法格」(主語, 目的語等)と「具体格」—主に場所格(所格, 具格等)に分けようとする, 動作主格は文法格の主語の機能と具体格の具格的機能によるあいまいさから, 明確に区別出来ないことが明らかになってくる。この動作主格は動詞がコンジャンクトかディスジャンクトかを決定する機能を持っている。

注¹「コンジャンクトは1人称主語と起り, ディスジャンクトは非1人称主語と起る。(叙述文に於て)

コンジャンクトは2人称主語と起り, ディスジャンクトは非2人称主語と起る。(疑問文に於て)

例えば, nya:「買う」という動詞が, 叙述文に於て動作主格が1人称なら, コンジャンクトの mailya(未来)又 maila:(過去)になり, 非1人称なら, ディスジャンクトの ma:ly(未来)又は ma:la(過去)になる」

目的格は, いわば間接目的語的機能をするから, 一般的目的語とは異なる。

無形格は文の主語的機能, 直接目的語的機能と補語の機能をする。

(3) Thwa saphww khaa. (補語)

これは 本です

Wa pasalay' bain, laa:gw saphww dw la: ? (主語)

この店に素晴らしい本があるか

Wan, pa:sa:ya:ta chagww saphww byla. (目的語)

彼は友人に本を与えた。

§ 5.2 エスキモー語の格の機能

E.A. ナイダ氏は格語尾を8つに分類しているが, F.W. ピーコック氏はそれらに, 呼格を加えている。ピーコック氏に従えば, 2つの独立格と7つの従属格ということになる。

自動格 (Intransitive)	～は, ～を
他動格 (Transitive)	～は, ～の
所格 (Locative)	～に, ～で
奪格 (Ablative)	～から
通過格 (Vialis)	～を通過してゆく
到来格 (Terminative)	～に到着する
対格 (Accusative)	～を
類似格	～の様な
呼格 (Vocative)	～よ

注²「自動格(受動), 他動格(能動)は, 「文法の原理」イエスペルセン著, 半田一郎氏訳による。

ちなみに「新言語学問答」ナイダ著, 郡司, 伊東両氏訳は, これを絶対格, 相対格としている。」

さて自動格は主語か又は目的語の機能をする。自動詞と一緒に使われる時は主語になる。

soruse K pingoarpoK = 子供が遊ぶ
 子 供 彼が遊ぶ

他動詞と共に用いられる時は目的語になる。

Inuk tussarpavut
 エスキモー 我々は彼を聞く = 我々はエスキモーの言葉を聞く

こういった様に、名格が目的語として機能するのは能格 (ergative) を持つ言語の特色である。例えば日本語に於ても「書読む」又「月見る」という様に名格の形が目的語として使われている。さきほど述べた(3)でみる様に、ネワリ語も又名格が目的語として使われているところから、やはり能格を持つ言語と考えてよいだろう。

注3
 (1)ネワリ語もエスキモー語も共に能格を持つ言語である。

他動格は主語と所有を表わす。

注3「Hockett は『多くの言語において他動詞も又目的語の人称や数を反映する様な活用をする』と述べている。」アイヌ語は目的語の数(単, 複)が他動詞の形に反映する。中世蒙古語では、主語、目的語に女性及び女性に関する限定語句がある場合には述語動詞の語尾も女性形をとった。又日本語では、動詞が尊敬の形を取るの、[が]格が目上の人るときばかりではない。「を」格や「に」格に目上の人があられても動詞に敬辞がつく。

を お 待 ち す る
 に 申 し 上 げ る

ライオンズ(1968)に従えば、英語は

Him moved } → He moved になり
 He moved }

エスキモー語は

Him moved } → Him moved が選択されたとしている。
 He moved }

主語の場合

Arnab oKautivānga = 婦人は私に告げる
 婦人 彼女は私に告げる

所有の場合

Arnab Kittornganga = 婦人の子供
 婦人の 彼女の子供

対格は目的語を示す。

Takkovunga nunamik = 私は島を見た
 私は見た 島

所格は場所を示し、奪格は方向の出発点を示し、通過格は通過等を示し、到来格は到着点を示す。

類似格は「～の様な」を示す。

nunatut 島の様な

呼格は親族関係の人にのみ起る。

Atatak お父さん /

Ernik 息子よ /

一般に1次語として主格、目的格、補語格、2次語として属格、3次語として時間格、場所格、程度格、様態格、手段格等と分類される。しかし、エスキモー語の場合、他動格が1次語と2次語の両方にまたがり、又目的語と様態的機能が密接であるから1次語と3次語がはっきりしない。又ネワリー語も動作主格は、1次語と3次語にまたがり、属格も2次語と3次語にまたがっていることから、上の分類は必ずしも適切でないであろう。ネワリー語にもエスキモー語にも2つ以上の語機能を実現する格がある。

§ 5.3 格の副詞的機能

^{注4}
ラテン語の対格と属格は種々の「副詞的」機能を有している。先ず対格の場合をみると、

Illud assentior

それを(その点について)私は同意する。

Tua vōx hominem sonat

君の声は人間を(人間らしく)ひびく。

Vixit triennium postea

彼はその後3年間を(3年の間を通じて)生きた。

属格の場合

tum temporis

時の その時 = その時に

hūc miseriae

あわれさのここまで = ここまであわれに

エスキモー語で

angerungnarmangapse tamattominga

あなたが約束出来るかどうか これを(これについて)

ネワリー語で

Jymy thway'kaa pa:sa:ya:ta mhasyyka:byy.

私は友人を(友人について)紹介したい。

wan, jytaa khyca:ya:la:gyn, jhyrka: byla

彼は私に犬の(犬のために)10ルピーを与えた。

〔2〕ネワリー語もエスキモー語も目的格、属格に副詞的機能を有する。

このことは一般的にどの言語においても言えることと思われる。

ネワーリ語の目的格には「心情的」なところが強くみられる。つまり、対象との間により親しい感情が存在する。

Jytaa nypw cwasa: ma:la

私には 2 本のペンが必要だ。

注4 「属格」の最も典型的な機能は、内心構造において、名詞又は名詞句を修飾することである。」

§ 5.4 格の相補的機能

エスキモー語において、自動格の主語と他動格の主語、又目的格の目的語と自動格の目的語は各々相補分布をなしている。

<u>sorusek</u>	pingoarpoK	女の子が遊ぶ	(自動格主語)
子供	彼女が遊ぶ		
<u>Arnab</u>	okautivanga	婦人が私に告げる	(他動格主語)
婦人	彼女が私に告げる		
<u>TerraniaK</u>	takkova	彼はきつねを見た	(自動格目的語)
きつね	彼はそれを見る		
Takkovunga	<u>nunamik</u>	私は島を見た	(目的格目的語)
私は見た	島		

又ネワーリ語においても属格の -mha と -gw は相補分布し、前者は次の対象語が生物を表わし、後者は対象が非生物を表わす。所格においても -ya:kya (又 -kya) と -ay' (-y' 又 -y) は生物、非生物の関係で相補分布している。

§ 6 格の形成

ネワーリ語の格語尾は次の通りである。

(4)

	類 1	類 2	類 3
複 数	* 直立形 + -pyn,	直立形 + -ta	**
所 格	直立形 + -ya:kya 又は + kya		* 斜形 + -ay' (子音の後) + y' (a 又 ai の後) + y (y 又 w の後)
動作主格	斜形 + -n, (母音語幹の後) + -an, (子音語幹の後)		

* 直立形 = upright form, 斜形 = oblique form

** 類 3 においても、直立形 + -ta が起るが、その時の意味は「～の種類の」となる。

ネワリー語では名詞が3つに分類される。類1は尊敬的生物，類2はあまり尊敬的でない生物，類3は無生物である。格変化を行う際，直立形か斜形のどちらかの語幹を基にする。

例えば所格の場合，類1と類2の名詞は，直立形の語形に基づき，類3は斜形に基づき格語尾をつける。動作主格の場合は，類とは無関係に斜形を基にして格語尾がつけられる。但し，類1と類2の名詞では，任意の形，直立形＋*-nan*，が用いられる。意味的には変らない。

属格の場合は

直立形＋*-ya:gw<ly>*（この後に無生物）

pa:sa:~ya:gw cwasɑ:
友 の ペン

直立形＋*-ya:mha*（この後に生物）

pa:sa:~ya:mha ka:y'
友 の 息子

施与的な意味の属格では

直立形＋*-ya:la:gyn* が用いられる

pa:sa:~*ya:la:gyn*,
友のために

目的格の場合は

直立形＋*-ya:ta* をつける。

wan, pa:sa:~ya:ta chagww saphww byla
彼は友に一冊の本を与えた。

エスキモー語の格語尾は次の通りである。

(5)

	単 数	複 数
自 動 格	単母音 K . k . t	t
他 動 格	b	t
所 格	me	ne
奪 格	mit	nit
通 過 格	kut	tigut
到 来 格	mut	nut
対 格	mik	nik
類 似 格	tut	titut
呼 格	k	k

呼格は子音を取除き k を付加する。

エスキモー語は全ての名詞を通して、一定の接尾辞により格標示される。それに対して、ネワリー語は所格と属格において名詞が生物か無生物かによって格語尾が異なる。ネワリー語においては名詞の有生、無生が密接に結びついている。

類 1	類 2	類 3
ma:n, ya:kya	banjaa:ya:kya	la:ka:may'
お母さんと	行商人と	くつの中に
ma:man,	banja:lan,	la:ka:man,
お母さんによって	行商人によって	くつで

注5
ネワリー語では格と名詞の有生、無生とが密接に対応しており、有生が更に尊敬のか非尊敬のかの階級的区別に対応している。

{	有 生	{ 尊 敬 的
	無 生	{ 非 尊 敬 的

注5 「性が有生性 (animacy) と性別 (sex) に「自然的」に基づいている限りにおいて、2つの区別、つまり有生対無生、女性対非女性が含まれている。しかしネワリー語の場合、有生対無生、尊敬対非尊敬で、女性対非女性の対応はない。」

有生対無生という限りにおいて、ネワリー語は格と性が前提的ともいえる。

〔4〕ネワリー語は格範疇と性範疇が、又格範疇と階級範疇が相互依存の関係にある。

上の(4)と(5)の表にみる格語尾は、ネワリー語、エスキモー語共に名詞の後に付加される。

エスキモー語の場合

ArvertarpoK	iglunganut
彼は歩く	彼の家へ
Aularniarpunga	illiniarvingagut
私は行こう	彼の学校を通して

ネワリー語の場合

Asanay'	wanya
アサンに	(私は) 行く

〔5〕ネワリー語の格表現方式は後置的であり、エスキモー語のそれは接辞方式といえる。

§7 格 と 数

エスキモー語では所有接辞をもたない名詞は単複同形である。格体系が不均整であることがわかる

(6)

	nuna「島」単・複	n̄legak「主人」単・複
自 動 格	nunavut	n̄legavut
他 動 格	nunapta	n̄legapta, -kapta
所 格	nunaptingne	n̄legaptingne
奪 格	nunaptingnit	n̄legaptingnit
通 過 格	nunaptigut	n̄legaptigut
到 来 格	nunaptingnut	n̄legaptingnut
対 格	nunaptingnik	n̄legaptingnik
類 似 格	nunaptitut	n̄legaptitut

次の所有接辞をもつ格変化においても(5)であげた通りには変化せず、単複同形がみられる。

nunangane

nunangine

彼の島で(単)

彼の島々で(複)

(5)の表に従えば単数は ne ではなく me になるはずであるのに、「ゆれ」の現象がみられる。同様に、

^{注6}「nagvaruma k̄enaujanik tunitjniarpunga illingnut」

もし私が見つけるなら

お金を

私は与えよう

あなたに

同様に、

nunanganit

nunanginit

彼の島から(単)

彼の島々から(複)

ここの単数も mit となるはずである。

nunangagut

nanangitigut

彼の島を通して(単)

彼の島々を通して(複)

ここも単数は kut となるはずである。

nunanganut (単)

nunanginut

彼の島へ

彼の島々へ

単数では、mut となるはずである。

^{注7}
nuna nga nik

nunanginik

彼の島を(単)

彼の島々を(複)

単数では、mik となるはずである。

^{注7}「nga－彼の－だけを取り出しても何の意味もない。」

ネワリー語における複数の変化表は次の通りである。

(7)

	直 立 形	斜 形
類 1	-pyn,	-pyny 又 -py
類 2, 3	-ta	-tay'

複数には2つの接尾辞がある。1つは類1にあり、もう1つは類2、類3にある。

そして各々、直立形と斜形の語幹があるが、意味的には変わらず、この2つは交互に使用される。

例えば, ma:n,「母」(無形格)の複数には, ma:n, -pyn, である。この属格単数はma:n, -ya:gw
その属格複数はma:n, -pyny-gwとなる。

又 banjaa:-ya:kya「行商人において」(所格単)の複数は banjaa:-tay'-kya

上でみる通り、複数を表わす接尾辞は格語尾の前に置かれる。

ここで複数の意味について述べると, ma:n, -pyn, は「母親とその家族の人々」の意味で「母親達」ではない。

La:ka:n, nyaa: wanya,
くつ(複) 買 う 行 く

私はくつを買いに行くつもりだ。

La:ka:n, thay'n, cwan,
くつ(単) ~の様な みえる

それはくつの様だ。

Thwa cwasa: khaa
これは ペン(単) です

これはペンです。

Thwa pasalay' byngw cwasa:dw:la: ?
こ の 店 に 良 い ペン(複) あるか

この店に良いペンがあるか。

ネワリー語もエスキモー語も単複同形的な要素を多分に有している。

ラテン語では屈折接尾辞が名詞の一定の格と数を同時に示すという意味で格と数が「融合」(fused)している。ところがネワリー語では(7)の表の如く「分離」している。エスキモー語の所有接辞をもたない名詞は「単複同形の融合」となり、所有接辞を持つ名詞は「融合」している。

〔6〕ネワリー語は格と数が「分離」しているのに対し、エスキモー語は「融合」している。

§8 格 と 人 称

ネワーリ語には、人称代名詞に3種ある。

1. 親称代名詞 — 子供、低階層の人々
2. 尊称代名詞
3. 高位称代名詞

2の尊称代名詞には1人称が存在しない。

3の高位称代名詞の1人称は王様が自分自身を言う時に使われる。

そしてこれらの格変化は(4)以下で述べた方法でなされる。例えば親称代名詞単数1人称では、*iy*という語幹に、同2人称は *cha-* に、同3人称は *wa-* に接尾辞がつけられるのが原則となる。但し目的格の場合、1人称では *-taa*、2人称は *-ta*、3人称は *-ya:ta* 又 *-yta* となりゆれがある。又属格には対象に対する尊敬を示す形として、*jymy* がある。

1人称複数には2つの種類がある。1つは、話しかけられた相手を含む場合、もう1つは話しかけられた相手を含まない。格変化は各々になされる。例えば親称代名詞の1人称(相手を除外)複数では、無形格は *jypyn*、その他の格は *jymy* を語幹とし、動作主格は *-san*、所格は *-kya*、目的格は *-ta*、属格は *-gw* 又は *-mha* を付加する。1人称(相手を含む)複数では *jhyy* を基にして接尾辞を付けていく。2人称無形格は *chypyn*、他の格は *chymy* を基とする。3人称無形格は *ypyn*、他の格は *ymy* を基にして接尾辞が付加される。属格では、対象に対する尊称形が用いられ、1人称(相手を除外)は *jymy*、1人称(相手を含む)は *jhyy* である。

エスキモー語には3人称なるものは特になく。必要なら指示代名詞 *una* 又 *tamna* が使われる。

1人称単数 *uvanga* (自動格)、同複数 *uvagut* (自動格)。

2人称単数 *igvit*、同複数 *illipse*、3人称単数に代る指示代名詞 *una* 又 *tamna* 同複数に代る *ukkua* 又 *tāpkua* は各々に、格変化を(5)の表を基本にしながら行う。

エスキモー語では人称は普通、接尾辞によって示されるのが普通である。

例えば

<i>igluga</i>	私の家
<i>aularpose</i>	あなたは行く

人称が接尾辞で表わされている場合、強調としてのみ機能する。

ネワーリ語では、人称代名詞が省略される事が多い。

例えば

	<i>Gana</i>	<i>nya: na: ?</i>	
〈あなた〉	どこで	買った	
	<i>chapw</i>	<i>nya:y'</i>	<i>ma:la</i>
〈私が〉	1 個	買う	必要がある

だから、わざわざ人称代名詞が使われる時は^{注8}強調の色合が濃い。

〔7〕ネワリー語の格と人称の階級と対応し、1人称複数は聞き手を含むか含まないかが格に対応する。

〔8〕エスキモー語は、人称は接尾辞で示されるが、強調の時は、人称代名詞が置かれる。

ネワリー語もエスキモー語も共に

名詞（他の品詞も同様）＋接尾辞

という型をとる。語順において次の違いがある。

ネワリー語

<u>way-gw</u>	<u>saphww</u>	
彼の	本	彼の本

エスキモー語

<u>aglaitnga</u>	
本 彼の	彼の本

エスキモー語では、nga「彼の」に附加的感を感じる。

^{注8}「日本語では『行く』だけで充分で、あいまいさをさけるために『私が』『あなたが』が付加される。『私が』『あなたが』は省略ではなくむしろ補語であるという説がある。『面白い』『この本は面白い』の可能な日本語は、主語は『従』、述語が『主』と認められる。こういったことは、ネワリー語、エスキモー語にもみられるようである。固有の三人称の人称代名詞は、日本語にはもともとなかったのだと柳父章氏は述べている。」

^{注9}ネワリー語では指小辞 -cai, -cy がある。この接辞は直立形語幹のすぐ後に続き、格語尾が続く。

直立形語幹＋指小辞＋格語尾

例えば

dwgw-cy-ta	（目的格）
やぎ 小に	小やぎに
ma:n, -cy-gw	（属格）
母 小の	お母ちゃんの

指小辞には「大きさが小さい」という意味と「取るに足らない」という意味がある。

ma:<m>に指小辞をつけるのは2つの方法で使われる。1つは子供がお母さんに対する愛情を示す時、^{注10}「～ちゃん」、もう1つは軽侮的に使われる。例えば、sasaa ma:n, -ca:「妻の母（ばばあ?）」

注9 「英語では、-le, -ling, -let, -kin にあたる。」

注10 「英語では、-aster が使われる。」

類 1 の名詞ではこの 2 つが交互に用いられ、類 2, 3 では「取るに足らない」という意味がほぼ固定している。

指小辞は又複数においても使われる。

ma:n, -ca:-pyn, (無形格)

お母ちゃんとその家族(同様に愛称)の人々

-pyn の前に指小辞が来る時は愛称的に使われるが、-ta の前に指小辞が来る時は軽侮的に使われる。

ma:n, -ca:-ta

エスキモー語は、指小辞と他の品詞が一体になっている。

-galakpoK 彼は……………少し

kikkertaK 島

kikkertarsuk 小さな島

§ 10 分 類 辞

数詞に付加される分類辞はしばしば代名詞的に使用される。

chapw nya:y' ma:la

ひとつ(のもの) 買うことは 必要だ。

分類辞は代名詞的に用いられるから、格変化をする。次は所格的代名詞としてである。

Ra:mya:kya nygww saphww dw

ラームは 2 冊の本を持っている。

分類辞の格語尾は類 3 の名詞のように変化する。語幹斜形は動作主格と所格において、語幹直立形は他の格において起る。

属格の選択的接尾辞 -nan, は起らないし、又複数の語尾も起らない。

(8)

	無 形 格	所 格	動 作 主 格	目 的 格	属 格
-gw<ly>	-gww	-gwlyy	-gwlyn,	-gwyā:ta	-gwyā:<gw>
-pa:	-pa:	-pa:y'	-pa:n,	-pa:ya:ta	-pa:ya:<gw>
-ga<l>	-gaa	-galay'	-galan,	-gaaya:ta	-gaaya:<gw>
-pw	-pw	-pwy	-pwn,	-pwyā:ta	-pwyā:<gw>
pa:<t>	-paa:	-pa:tay'	-pa:tan,	-paa:ya:ta	-paa:ya:<gw>

類 1 と類 2 で起る分類辞 -mha は所格において、類 1 : 2 と同様の格語尾を持つ類 3 の分類辞とは異なる。

つまり、所格において -mhasykya と -mhay'sykya がある。

chamhasykya

彼等の1人

nygww

2冊

saphww dw.

本をもっている。

絶対的照応点とは、場所や方向を示す際に照応の行なわれる環境のある特徴である。

〈～の下流にある〉

〈海から近い〉

同じく絶対的という標題のもとに含められるべきものとして「北に」「南に」「東に」「西に」のような場所的区別がある。エスキモー語はまさにこれにあたる。

^aane 南に

avane 北に

この語がそのまま格変化を行う。^aane は ^aangat (動作主格) ^auna (通過格), aunga (到来格) になり、同様に avane は avangat, av^auna, avunga というようになる。

それに対して相対的照応点というのは典型的な発話場面のある構成素で場面や方向を示すのに役立つのを言う。ネワリー語がこれにあたる。

S 51. 12. 25 脱稿

参 考 文 献

- Bloomfield, L. 1969. Language. George Allen & Unwin Press.
- Di Pietro, R. J. 1971. Language Structure in Contrast. New-House Publishers, Inc.
- 『言語の対照研究』1974. 小池生夫訳 大修館
- Gallimard, É. 1968. Le Langage. Orion Press.
- 『言語の構造』1972. アンドレ・マルティネ編 泉井久之助監修 紀伊国屋書店
- Hjelmslev, L. 1963. Sproget - En Introduction. Charles E. Tuttle Co. Inc.,
- 『言語学入門』1972. 下宮忠雄(家村睦夫)共訳 紀伊国屋書店
- 泉井久之助 1967. 言語の構造 紀伊国屋書店
- 泉井久之助 1968. ラテン広文典 白水社
- Jespersen, O. 1924. The Philosophy of Grammar. George Allen & Unwin Press.
- 『文法の原理』1963. 半田一郎訳 岩波書店
- 高津春繁 1967. 言語学概論 有精堂
- Lyons, J. 1968. An Introduction to Theoretical Linguistics. Cambridge Univ. Press.
- 『理論言語学』1973. 国広哲弥監修 大修館
- 三上 章 1975. 象は鼻が長い くろしお出版

- Nickel, G. 1971. Papers in Contrastive Linguistics. Cambridge Univ. Press.
- Nida, E.A. 1947. Linguistic Interludes. New York.
- 『言語学問答』 1968. 郡司利夫 共訳 篠崎書林
伊東 正
- Paul, H. 1920. Prinzipien der Sprachgeschichte.
Tübingen : Max Niemeyer Verlag.
- 『言語史原理 上』 1976. 福本喜之助訳 講談社
- Peacock, F.W. 1968. Eskimo Book I Labrador.
- _____ 1974. Eskimo-English Dictionary.
Memorial Univ. of Newfoundland.
- _____ 1974. English-Eskimo Dictionary.
Memorial Univ. of Newfoundland.
- Sresthacharga, I. }
Masky, J.N. } 1971. Conversational Newari. Tribhuvan Univ.
Hale, A }
- 榎垣 実 1973. 日英比較語学入門 大修館
- 柳父 章 1976 翻訳とはなにか 法政大学出版局

* 本稿は 1976 年 11 月、大阪外大言語学会（於大阪外国語大学）において口頭発表した内容に修正を加えまとめたものである。